

避難所ではどうだったのか

～従事した市職員が感じたことは～

3月11日14時46分、宮城県沖を震源とするマグニチュード9.0の大規模地震が発生した。死者行方不明者あわせて20,000人超。大地震に加え津波被害、原発事故という重なる災害が起きていた。

山形市は、3月11日に「災害対策連絡会議」を設置、3月14日には市民生活の安定を図るため「市民生活安定推進本部」を設置し大地震災害に対応した。

そして、被災県からの避難者受け入れ施設として3月15日から市総合スポーツセンターに、被災地から避難された多くの方々の受け入れ。宮城県のほか、福島県原野に近い地域から避難された方が多く集まり、ピーク時には1,000人にも及んだ。

避難所では、市職員が3月16日夜から2交代で勤務にあたった。5月以降は運営の一部を委託先へ引き継ぎ、多くの避難者たちは2次避難先へ移り、6月30日に閉鎖した。今号では、山形市で行われた被災者支援について、特集1では避難所の様子を、特集2ではボランティア活動を取り上げます。

避難所勤務した市職員を対象にアンケート調査を実施した。今回の避難所で市職員が避難者からどのような声を聞き、自身がどう感じたかを取り上げたい。

アンケートは無記名とし、自由記述で「避難者と話した内容」と「市職員が感じたこと」を回答してもらった。勤務にあたった市職員のうち35名に依頼し、24名から回答を得た。主な回答を紹介する。

問 避難者と話した内容は？

- 1 物資に関すること
 - 寒いので毛布・カイロがほしい。
 - 春に向けて薄い生地の方がほしい。
 - もらった洋服のサイズが合わない。
 - 家族が多いので、使い切りでなく、ポトルのシャンプーがほしい。
 - 多くの人に行き届くよう、小分けにした洗剤の量でも大丈夫。
- 2 シャワー・風呂に関すること
 - 赤ちゃんや子どもにもシャワーを使わせたい。
 - 安い銭湯を紹介してほしい。
 - 入浴施設の利用料金に対する援助をしてほしい。
- 3 避難所の設備に関すること
 - すぐにテレビを設置してほしい。
 - 夜間、寒い(あるいは暑い)ので空調を調節してほしい。
 - 着替えをする場所が少ない。
 - 洗濯機がなかなか使えない。

○子どもが幼稚園へご飯持って行くとめ、調理スペースを借りたい。

4 ペットに関すること
 ○ペットを一時無料で預ってくれるところはありますか。
 ○ペットの体調が悪いので預け先を教えしてほしい。

5 健康に関すること
 ○子どもを医者に診せたい。近くの医院はどこか。
 ○娘が妊娠中だが、周囲の子どもたちが騒いでおり、ゆっくり休むことができない。体調を崩したので、病院へ連れて行きたい。

6 避難所生活に関すること
 ○数組の家族と一緒に来たので、居住スペースをまとめてほしい。
- 周囲の人がうるさく、場所を移りたい。
- 避難所に設置したパーティションが、コミュニケーションを阻害している。
- 自分だけの避難ではないので、みんなが守るべき避難生活のルールを全員に周知してほしい。

7 感謝の声をいただきました
 ○配膳の際、「食事がとてもおいしい」「市職員の労をねぎらうとともに、「避難所では山形の皆様にとっても良くしていただきました」と感謝の言葉をいただいた。
- ただ一日中ここにいるだけでは精神的にもどうしようもない。何かやらせてほしいので、掃除用具を貸してください。

乱れるなどの課題もでてくる。避難所を出てからも気になる。
 4 女性に関すること
 ○従事者に女性がいることは大切だと思う。夜間勤務から女性をはずしていたが、子どものことお母さんが相談したい時等、女性職員がいた方が良い場合がある。

○避難所の運営が軌道に乗ってからは、被災者の意見を取り入れながら徐々に改善することができたが、立ち上げ時は、女性や子ども、高齢者などに対する視点が欠けていたと思う。当初から女性職員を常駐させるなど、あらゆる世代・性別の人にも優しい避難所にできたらよかったと思う。(女性の洗濯干し場の問題など)

5 その他思ったこと
 ○避難者の方々と通路などですれ違った際にあいさつをされた。
- 日がたつにつれて、必要なものや情報も変わるの臨機応変な対応が必要と思う。
- 勤務をする私どもも避難者の方々も、お互いの立場を思いやり、考えながら「共働」できた経験はとても良いものだったと思い、また勉強になった。

○必要なものが時間の経過とともに変わってきた。情報や在庫の状況が把握できず、物資を提供して下さる方に何が不足しているか適切に伝えられたか疑問



避難所となった山形市総合スポーツセンター

ネットワークでボランティア

被災者が避難所に多数詰め掛けている…との情報を得た長谷川利子さん(十日町在住)は、週一度、市スポーツセンターでボランティア活動をしていたことから、いち早く避難所に駆けつけ、被災者のニーズを聞いてもらった。最初は子どもたちの衣類を知り合いから集めた。次に乳幼児を沐浴・入浴させたいという声には、送迎つきで自宅を開放した。燃料不足の中知人の佐藤和子さん(桜田西在住)にも声をかけ、二人で支援した人は延べ132人にもなったという。長谷川さんが住む町内の方々からも協力をいただき、自宅の風呂を開放してもらった。さらには、新一年生が使う「体育着を入れる袋」を作るため、市内の手芸店やミシンを踏んでくれたお母さんたちからもあたたかい支援をいただいた。そして避難所の子どもたちに贈られたという。

長谷川利子さん(右)と佐藤和子さん



よりよい避難所となるには
 ●思い込みにとらわれず、素早い対応に心がける
 ●支援される側「支援する側」と決め付けない。また前例踏襲でなく、目の前のニーズを的確に捉え、それに素早く対応するよう努める。

●女性目線の支援体制を図る
 当初から女性職員を常駐させる。また女性用品の確保と女性からの手渡し、更衣室や女性用洗濯物干し場、授乳スペースや育児スペースの確保等女性への配慮と素早い対応が必要。

●共に支えあう環境づくりに努める
 避難所の運営体制には、あらゆる世代や性別のニーズを反映できるように努める。

編集協力員 松田利紀男

私のボランティア

3月12日、街のなかで車中から「先生!」と声をかけられた。声の主は教え子のAさん。わけありの様子から、樋口洋子さん(十日町在住)は「どうしたの?」とたずねた。Aさんは出産のため七日町の実家に里帰り中での地震に遭遇。実家はマンションの8階でライフラインが途絶えた。11日夜から生後30日の赤ちゃんとお両親とで、市役所庁舎に避難した。毛布や食料等は配られたが、「赤ちゃんを沐浴させたい」というので樋口さんは自宅を開放。沐浴後Aさんたちは避難所の市役所に戻った。